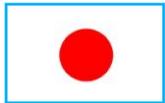




日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.69

日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2011年9月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 Tel.047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@jjs9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫



日米を結んだジャズと友情の絆



Eleventh annual SATCHMO SUMMERFEST August 4 to 7
今年も心の交流がいっぱい！外山喜雄&セインツと行く「サッチモの旅」2011

外山喜雄&セインツと行く「サッチモの旅」2011。今年は計19人が参加、ジャズと“ジャズの王様”ルイ・アームストロングの故郷ニューオリンズで、彼の誕生日(8月4日)を中心に毎年繰り広げられている「サッチモ・サマーフェスト」(今年は第11回)を満喫した。そして、もう一つ、大きな課題も無事、和やかにこなしてきた。それは3.11東日本大震災に当たって、いち早く被災地のジュニアジャズバンドに楽器を補充するための資金を提供してくれた「ティピティナス財団」を訪ね、子供たちからのお礼の寄せ書きを記した「大漁旗」を手渡すこと。財団のみなさんの大歓迎と心温まる歓待ぶりは、日米のジャズの絆をいっそう強く大きくしてくれた。では、そんなニューオリンズから…。



「ニューオリンズのみなさんありがとう」の気仙沼スウィング・ドルフィンズからの寄せ書きを記した大漁旗を囲んで…ティピティナス財団創設者、ローランド&メアリー・フォン・カーナトフスキー夫妻(後列右から3、4人目)とキム・カットナー事務局長(後列左から4人目)らと「サッチモの旅」参加者一同)＝8月6日、ニューオリンズ・アップタウンの創設者夫妻宅で

**ルイ・アームストロング国際空港に
TBC brassバンドがジャズで歓迎**

「外山喜雄&セインツと行く“サッチモの旅”2011」一行、19人がニューオリンズ入りしたのは、8月3日(水)午後3時過ぎ。

ルイ・アームストロング・ニューオリンズ国際空港コンコースには、TBC (To Be Continued) brassバンドが



高らかにジャズを奏でて外山夫妻ら一行を出迎える(写真上)。他の乗客も思わぬサプライズに足を止めてカメラを構える。この演奏に外山夫妻、広津誠さん(CI)も加わり、“Welcome Party”の輪が広がる。

あのショーン君(Sean Michael Roberts, Tp)=右の写真の右端=が、今年も元気な姿を見せてくれた。忘れもしない、2005年のハリケーン直前、楽器贈呈のためにサッチモの旅一行がG.W.カーバー高校を訪れた際、同校OBとしてはしゃぎまくって出迎えてくれた“少年”。それがハリケーンで被災して愛用のトランペットも流され、2008年のサッチモの旅で Jazz Mass の教会を訪れた際、外山さんの隣でボロボロのトランペットを吹いていた“青年”。かなり打ちひしがれていて、外山さんでさえ彼がショーン君とは気づけなかったほどだ。



「あまりひどかったので、この子に“今度、日本からトランペットを送ってあげるよ”って約束したんです。あとでそれがショーン君と分かって本当に驚きました」と外山さん。約束通り、

後日、ピッカピカのトランペットが彼に贈られた。その喜びの模様はす

でに会報でお伝えしているが、それ以来、空港での彼との再会は、まるでホームランを打った選手が、同僚に迎えられるような喜びにあふれるものだった。今年も、おどけて握手し、ハグ…腕にタトゥーなんかしちやって、「ね、いいでしょ？ え？ ボク、もう25ですよ！」。外山夫妻が目細める。TBC には、やはり援助してあげなくては…と、ここで1000ドルを寄贈。

ニューオリンズ初日の夜は、揃ってバーボンストリートへ。外山夫妻が JAZZ 修行中に住んでいた住居の下にあるレストラン「Pat O'Brien」の中庭でガンボ、ジャンバライア、レッド・ビーーンズなどニューオリンズ料理に舌鼓、名物のカクテル「ハリケーン」は、にじんだ汗を吹き払ってくれる爽やかさ。

Visit to O. Perry Walker High School & Mr. Wilbert Rawlings

**ブラスバンド、ゴスペル、ダンス…
広がるP. ウォーカー高校の部活**

翌4日(木)はサッチモ「110歳」の誕生日。まずは朝一番に迎えるバスでオー・ペリー・ウォーカー高校(O. Perry Walker High School)へ。ミシシッピに架かるニューオリンズ大橋(Greater N.O. Bridge)を渡って川の東、アルジェ(Algiers)側の General Meyer Ave へ。ここ数年、日本から楽器を送り続けている高校。貧しい地区なのに今年は「東日本大震災被災地のために…」と、



わざわざライブを開き、寄金を集めて我々に義援金と楽器まで贈ってくれるという。



バスが着くと、バンドルームには、あの顔、この顔…ジャズバンドのメンバー、音楽ディレクターのローリンズ先生(Wilbert Rawlings)、文学の先生で日本語ペラペラのエリックさん(Eric Michaelson)、父兄の方々…が、勢揃いして笑顔で迎える。挨拶に立ったローリンズ先生は、「みなさんから楽器を贈っていただいたおかげで、聖歌隊やダンスなど、

音楽活動がどんどん広がっています」と。この席で計1830ドルの小切手が外山夫妻に手渡された。中には25ドルといった少額の小切手も含まれていて、なにやらジーンとさせられてしまう(写真下)。「まさかこちらが義援金を受け取るなんて考えてもいませんでしたよ」と外山さん。

**「ジャズとサッチモをありがとう！！
日本は必ずまたスウィングします」**

外山夫妻が返礼に立つ。「ここにいる日本からのみんなも、この土地で生まれた

ジャズとサッチモに大変な影響を受けてきています。ジャズは20世紀が、世界中に贈ってくれた素晴らしいプレゼント



トなのです。日本では地震と津波で2万人を超える方々が亡くなりましたが、ニューオリンズのこのジャズのように、みなさんのお陰もあって日本は再び、必ずスウィングしてくれることでしょう」と。

ジャズの演奏、聖歌隊のコーラス、見事なモダンダンス(前頁下の写真)…セイントズが登場して、なんと、日本の名曲『浜辺の歌』が飛び出した。それも広津さんのクラリネットをフィーチャー、ゆったりとスローテンポで始めると、どうしたってあの美しかった被災地・東北の浜辺を思い浮かべてしまう。ツアー一行の女性のみなさんがハンカチで涙をぬぐう。男性も「いやあ、私もツーンとききましたよ」。最後は『聖者の行進(When The Saints Go Marchin' In)』で生徒たちとジャムセッション。



歓迎会が終わると、広い図書室に皆が集まり、父兄のみな

Steamboat NATCHEZ & Dixieland Jazz Cruise on the Mississippi

**川風を受け快適ジャズクルーズ
「デュークス～」の演奏を楽しむ**

夜はミシシッピをジャズクルーズするリバーボート「ナッチェス(NATCHEZ)」号に乗って、川風を受けながら the DUKES of Dixieland の演奏を楽しむ(写真右)。もうすっかりおなじみのメンバーだが、リーダー

のリチャード(Richard Taylor, Ds)の顔が見えない。昨年は病気で入院中とか、ケビン(Kevin Clark, Tp)の発案でツアー一行が励ましの



さんによる手作りのニューオリンズ家庭料理が振る舞われ、歓談の輪が広がる(写真右)。帰りがけに気づいたのだが、学校の入り口の「拳銃と



薬物持ち込み禁止」の大きな標識が掲げられていた(写真下)。この高校でも音楽指導を手助けし、外山夫妻やツアー一行とも親交を深めていた TBC のメンバー、ブランドン君



(Brandon Franklin)が事件に巻き込まれてピストルで射殺されたことも、まだ記憶に新しい。WJF のスローガン「拳銃に代えて楽器を！」は、まだまだ生々しい現実の中にある。

**ジョージ・ルイスのお墓参り
クラリネット持参の参加者も**

高校訪問の後、学校のすぐ近くのジョージ・ルイス宅を訪れ(あら、留守でした)、さらに近くの墓地(McDonoghville Cemetery)にあるジョージ・ルイスのお墓参り。今年は藤崎羊一さん(B)が、ウッドベースを待ち込んで演奏。『Lead Me, Savior』に次いで、広島から2年連続ツアー参加の土井田泰さんが、今年クラリネット持参で、セイントズとともに『朽ち果てた十字架(Old

Rugged Cross)』を奏で、超炎天下にもかかわらず、ご機嫌そのもの(写真左)。フレンチクォーターに戻って、このグループも、東北支援のライブで義援金を募ってくれた「ルーツ・オブ・ミュージック(Root of Music)」にもお礼参り。

寄せ書きを送っていた。で、彼に聞くと、「去年の12月に亡く



なったんですよ。あの寄せ書きにはとっても喜んでいたんですが…」と肩を落とす。

リチャード…そう、1995年、もう16年も前、私が初めてニューオリンズを訪れ、ナッチェス号に乗船、彼にサインしてもらったら、上手に「利茶度」って漢字

でサインしてくれた。驚いて聞くと「テリー(ジャズ評論家の故いッノ・てルヲさん)に教わったんだよ」。何年か経って、いッノさんが亡くなった(1999年)ことを告げると、涙をぼろぼろ流していた。その、いッノさんともこのツアーでご一緒したことがある。一番前列で腕を組み、厳しい表情で彼等の演奏に耳を傾けていた。夫人の磯野博子さんは、その後もずっと「サッチモの旅」の常連。リチャードの訃報には、顔を曇らせていた。

そんな船内のバーで外山さんが飲み物を注文、お金を払おうとすると「いやあ、長年ニューオリンズの子供達に楽器を有り難う！あなたからお金をもらうわけにはいかないよ」ですって。広津さんらも演奏に加わり熱演(前頁の写真下)。船を下りると、また Oyster…みんなで生ガキ、また舌鼓。私なんかは1ダースと白ワインを2杯。

Jazz Street & SATCHMO CLUB STRUT at Christopher Inn

セインツがいよいよ本格登板 「サッチモ・クラブ・ストラップ」

5日(金)は、いよいよセインツの本格登板。夕刻から始まるジャズストリート、サッチモ・クラブストラップ。それまではフレンチマーケット付近をぶらぶらしたり、とにかく暑いので、ホテルで涼んでいたり…(ま、昼寝です)。

セインツの舞台は、ここ数年同じ老人ホーム「クリストファー・イン(Christopher Inn Apartments)」のホール(写真上)。入居のお年寄りのみなさん、オー・ペリー・ウォーカー高校の先生や職員、おや！？NYC サッチモ邸隣の名物おばさん、88歳のセルマさん(Selma Herald)も姿を見せた。ニューオリンズにしては珍しく、ほぼ定刻の午後6時過ぎスタート。オープニングはもちろんサッチモのテーマソング曲『南部の夕暮れ(When It's Sleepy Time Down South)』…そして、Oh, good evening everybody! 演奏は10分間の休憩を挟んで8時過ぎまで2時間超。『Rockin' Chair』『Tiger Rag』『C'est Si Bon』で見せた外山さんとルシアン(Lucien Barbarin, Tb)とのユーモラスで絶妙な掛け合いには、会場は熱く盛り上がる。みなさん「いやあ、本当に素晴らしかった。来た甲斐がありましたよ。感動しました！」。広津誠さん(Cl)、再び『浜辺の歌』の熱演。



右手を複雑骨折してサポーターを巻いてピアノに向かった恵子さん、時折ギクッと痛そうな顔で右手を振る。「ちょっと痛かったんで、右手をかばっていたら今度は肩まで痛くなってしまっ…」。それでも『Heebie Jeebies』や『Lead Me, Saviour』などでは、しっかりバンジョーもこなす。「でも、このピアノの調律がむちゃくちゃだったので、バンドのみんな困り果てて

いたのよ。わかった？」…いや、私はそこまでは…。

『Bourbon Street Parade』や『聖者の行進』では、バンドが会場を回り、みなさんがセカンドラインで続く(写真中央)。セルマさんまで踊り出す(写真下)。ウォーカー高校

の先生方は踊りの輪を作って大パーティー。終わってどこかで食事でも…と、外山夫妻とバーボンストリートを散策していると、レストランを兼ねた「Music Legends Park」のCafé Beignetで、ついさっき演奏を終えたばかりの広津さん、山本勇さん(Ds)が地元のミュージシャンと熱演してはいませんか。バンジョーは浦安にいて、ディズニールランドにも出演していたリーさん(Lee "pLink" Floyd)、そして、リーダーのウィリーさん(Steamboat Willie, Tp)…。そこに外山さんが顔を出したのだから、ますます熱くなる。『Mack The Knife』『What A Wonderful World』の2曲だけでよくぞ収まったものです。

Discover SATCHNO! SUMMERFEST Saturday Seminar & Music

セミナーにセルマさんが出演！ アバキアンさん92歳！も登場

6日(土)、今度はサマーフェストの本番ステージ…おっと、そのまえにセミナーがありました。サマーフェスト会場から1ブロック先、フレンチマン通りにあるレストラン「Maison」で金曜日から3日間にわたるセミナー。これはもう毎年、サッチモの

研究者らが集まってその成果などを発表する、サッチモファンにとっては見逃せない“サッチモ教室”。その2日目、正午から“イの一番”にセルマさんとサッチモ・ハウス・ミュージアムの館長、マイケル・コグスウェルさん(Michael Cogswell)が登壇した(写真次頁左上)。セミナーは題して『よき隣人サッチモ

(Good Neighbor Satch)』。サッチモの隣の家にサッチモより前から住んでいたセルマさん。母親がサッチモ夫人のルシールさん(Lucille)とのつながりで土地を斡旋したようだ。といっても、サッチモは一年のうち300日ほどは、ツアーに出ている、自宅に落ち着く時間も少ない。それでも自宅に戻ってくると、近所の子供たちにアイスクリームをごちそうしたり、トランペットを手ほどきしたりした。セルマさんは、サッチモのヨーロッパツアーにも同行、「毎日、彼のハンカチを150枚も洗って

アイロンをかけてあげたのですよ」。そんな話が次々と飛び出す。

今年も大プロデュサー、ジョージ・アバキアンさん(92歳!)が例年通りNYCからご夫妻

で元気な姿を見せ、セルマさん、外山夫妻らと挨拶を交わす(写真上の上段)。そして、午後4時から「NEA Jazz Master George Avakian」と題する対談をこなしていた。



さんとルシアン掛け合い、サッチモが歌詞の書かれた譜面を落として思わずスキットした“歴史的シーン”の再現、『Heebie Jeebies』では拍手喝采。『セント・ジェームズ病院(St. James Infirmary)』では、聴衆と“ハリハリホー…”のコール&レスポンスで熱く盛り上がる。

演奏に先立ってステージにニューオーリンズ市の市会議長、ジャクリンさん(Jacquelyn B. Clarkson, President)が上がってきて挨拶、長年にわたったニューオーリンズ支援に対するお礼の言葉とともに、外山夫妻に感謝状を贈った(写真左の中段)。ツアー参加のWJFメンバー一行も紹介され、立ち上がったメンバーに盛大な拍手が送られる。ステージの後ろ

には「Yoshio Toyama & the Dixie Saints, Supported by Japan Foundation(日本国際交流基金)」の掲示も(写真下)。

「長年の日本からの支援に対するお礼の

気持ちが私たちの演奏への声援にも満ちあふれていましたね」と外山夫妻。炎暑にもめげず、ステージ前では、踊りの輪が広がり、セイントがこの超満員の会場に下りてきて、パレードするものだから、セカンドラインまで従って大騒ぎ。あつという間の1時間。

そうそう、改めてメンバーのご紹介を！ リーダー外山喜雄(Tp,Vo)・恵子(P,Bj)、広津誠(CI)、ルシアン・バーバリン(Tb)、藤崎羊一(B)、山本勇(Ds)。

A Courtesy Visit to TIPITINA'S Foundation & Welcome Party

ティピティナス財団を表敬訪問 気仙沼の「大漁旗」を手渡す！

この大奮闘にもかかわらず、この後、着替えもそこそこに今回最大の目的でもあるティピティナス財団(Tipitina's Foundation)への表敬訪問。迎いのバスに乗って一行が向か

ったアップタウン(the Carrollton section of up town)の訪問先は、超豪華な財団創設者の大邸宅だった。

2005年のハリケーン・カトリーナによる被災地ニューオーリンズに向けて、WJF が日本で最初の支援コンサート「緊急サッチモ祭」を開催して集めた寄付金など、1000万円を超える

義援金や多くの楽器が、現地のミュージシャンや学校、子供たちに贈られている。これらの支援がニューオリンズの人々の大きな心の支えとなり、その記憶がきっかけとなって今回、東日本大震災の際の逆支援、“恩返し”となった。いち早く支援の手をさしのべてくれたのが、このティピティナス財団。津

波で楽器や譜面、練習場まですべてを失った宮城・気仙沼のジュニアジャズバンド「スウィング・ドルフィンズ (Swing dolphins)」にすべての楽器を補充するための資金を提供、引き続き同・多賀城の小学生ジャズバンド「ブライトキッズ (Bright Kids)」にもすべての楽器を補充してくれている。

気仙沼の子供たちから「ニューオリンズのみなさん、ありがとう」など、お礼の寄せ書きをしたためた「大漁旗」や子供たちからの手紙を直接、同財団に届け、お礼を言うのがこの表敬訪問の目的。創設者のローランド&メアリー・フォン・カーナトフスキー夫妻 (Roland & Mary von Kurnatowski, Founder) と事務局長のキム・カットナーさん (Kim Katner, Managing Director)、財団関係者らが、サッチモの旅一行を出迎え、大邸宅の超豪華な1階5部屋ほどを、すべて開放しての最大限のもてなし。盛りだくさんのオードブル、シャンパン、赤白ワイン、各種酒類、すべて飲み放題(写真上)。次の



外山夫妻を囲んでティピティナス財団創設者夫妻(右端)とご家族。中央がキム・カットナー事務局長



ジャズミサとセカンドライン・パレード

ジャズミサとセカンドライン・パレード 教区司祭が外山夫妻の業績称える

7日(日)は、いわばニューオリンズ最終日。午前10時からルイ・アームストロング公園(いまだ工事中)近くのトレメ (Treme) 地区にあるセント・オーガスチン教会(St. Augustine Church)でのジャズミサ(JAZZ MASS)。あのシドニー・ベッシェ (Sidney Bechet) も通ったという由緒あるカトリック教会。地元

間には、まるで女王と王女の肖像画といった感じの立派なメアリーさん母子の油絵。東北の海にちなんで? ヒトデや貝殻などをかたどった置物の両脇に、気仙沼と多賀城の子供たちの写真がこれも立派な額に納められ、飾られていた。我々を迎えてのきめ細かい心配りがあちこちに散見する。

ご近所の方で、かつてフジテレビで英会話の番組講師を勤めていたというリックさん(Rich Look)も招かれていて、一行の誰彼となく話しかけ、いろいろと話題を盛り上げてくれる。なんとといっても日本語ペラペラ、敬語も完璧、ソフトな素晴らしい日本語なのです。外山夫妻は、この間30分ほど、地元ラジオ局のインタビューを受ける。「私たちのこれまでの支援、ジャズの故郷ニューオリンズからの逆支援が、嬉しいことに、いまやニューオリンズ、いや世界の一部の国々でも、本当にビッグニュースになっているんです」と外山夫妻は大感激。

食事も一段落して、「大漁旗」の贈呈式(写真下)。加えて、ス



ウイング・ドルフィンズの演奏活動のDVD、サッチモ祭な

どWJFの活動アルバムなどをプレゼント。全員揃って記念撮影(フロントページ)。おや、我々にもプレゼントが…。2枚組CDで、ティピティナス財団が、カトリナで大きな被害を被ったミュージシャン、ファッツ・ドミノ(Fats Domino)の住む下第9区(Lower 9th ward)の支援とニューオリンズが生んだ独特の音楽文化を守るために…と作成した『GOIN' HOME~A TRIBUTE TO FATS DOMINO』、それにティピティナスの素敵なバッジなど。関係者のみなさんが玄関先まで出てきて、手を振りながらずーっと帰りのバスを見送ってくれていたのも臉に残った。

Jazz Mass at St. Augustine Church & Second Line Parade

トレメのブラスバンドに交じって外山さん、広津さんも演奏に加わる(写真次頁上)。ゴスペル隊が賛美歌を奏でる。地区司祭のムーディーさん(Rev. Quentin E. Moody)が、サッチモの業績を称え、「What A Wonderful World」を高らかに歌い上げる。献金があって、皆で手をつなぎ、ハグしあったりして、ミサも終わりに近づくと、ムーディーさんが外山夫妻の名前を

アナウンスし、これまでのニューオリンズへの支援と気仙沼の子供たちへの楽器プレゼントを集まった700人を超えるミサの参加者に伝えてくれた。盛大な祝福の拍手が大聖堂にこだまする。

午前11時半、さあ、サッチモに捧げるジャズとセカンドライン・パレードの出発。教会の MASS に出ていたトレメのブラスバンドに外山さん、広津さんも加わって、教会から炎天下の路上にパレードが繰り出すと、もう周辺は大混雑。車椅子に乗って教会前で待っていたセルマさんが駆け寄って！日本からのお土産の扇子を

振り振り、外山さんの腕をつかんで一緒に行進する(写真上中)。地元の各種団体、TBC などブラスバンドや着飾ったダンス・グループも加わり、長い、長いパレードがルイ・アームストロング公園経由でサマーフェスト会場に向かう。その距離は15ブロック！ポケットに忍ばせていた温度計は38度Cを超えていた。直射日光が当たれば40度Cは下らないだろう。



これにはとても付いて行けそうにない。ツアー一行数人と冷房の効いたオイスター・レストランに逃げ込む。外山夫妻は、今度は地元テレビ局WWLに捉まりインタビュー。その模様

は、ステージでの演奏場面とともに、午後5時、10時のテレビニュースで流れる。

さらにこの後、午後3時から夫妻はセミナー会場で、地元ルイジアナ州立大学のフレッド・カステンさん (Fred Kasten)をインタビューに迎えて「It's a Wonderful World」対談(写真下)。冒頭、WJFの活動を簡潔に編集したビデオを見てもらい、外山夫妻のニュー

オリンズ武者修行以降のライドショー、大津波の惨状とスウィング・ドルフィンへの楽器プレゼントなどを伝えた日本のテレビニュースのオムニバス編集版など、中身の濃いセミナー。ここへもセルマさん、アバキアンさんらが姿を見せる。終わると、会場は温かいスタンディング・オーベイションに包まれた。



サッチモに捧げるペット全員集合 嵐のごとく吹きまくってフィナーレ

まだ、あるんです。外山さんの最後の出番は、午後7時半からのフィナーレ。トランペッター全員が集合してサッチモの誕生日をお祝いする「Trumpet Tribute & Louis Armstrong



Birthday Celebration」。トランペッターは、外山さんはもとより、地元の大スター、カーミット・ラッフィン(Kermit Ruffins)ら13人！(写真右上) それぞれが、もの凄い剣幕！？で…としか言いようがない勢いで「ハッピー・バースデー…」を吹きまくり、歌いまくる。「もう鼓膜が破れる！」(恵子さん)。いやあ、この勢いには、サッチモおじさんも、オー、イエー！どころか大きな目をむいていたに違いない。次の『聖者の行進』と来たら、それをも上回る迫力！！これが休みなしで30分超。外山さんもいや大変でしたねえ。この大フィーバーで目出度く、全日程終了。この間、超甘い、超大きなサッチモのバースデー・ケーキが惜



Trumpet Tribute & Louis Armstrong Birthday Celebration

しみなく会場に配られる。

…と、ステージ脇に思わぬ方がやってきた。ニューオリンズ・ジャズのパイオニアの一人、伝説のトロンボーン奏者、故

キッド・オリーのお嬢さん、バベットさん (Babette Ory) =写真

左下の左から

二人目。ロサンゼルスからやってきて、外山夫妻との再会を喜ぶ。「1967年、私たちが移民船に乗ってニューオリンズに向かった時、最初に入港したハワイで観光地など見向きもしないで、キッド・オリーさんを訪ねたんです。その時、そこにいらしたのがこの方、バベットさん。まだ13か14歳で、まあ、ホントかわいかったのよ」と恵子さん。…ということで、私まで夕食をごちそうになってしまった。かくして、外山夫妻の言う「驚きと感動の入り交じった嬉しい旅」も幕を閉じたのでした。また、来年が楽しみです。See you next year!

(小泉良夫)

“ジャズの故郷”ニューオリンズと心をつないで…

the 31st Anniversary of TOKYO NEW ORLEANS

例年のように“ジャズの故郷”ニューオリンズを思わせる炎暑の中、「第31回サッチモ祭」(TOKYO NEW ORLEANS JAZZ FESTIVAL)は、今年も「海の日」の7月18日(月・祝)、外山喜雄&デキシシーセイイツとアマチュア15バンド、それに飛び入りの子どもジャズ姉弟「サファリパークDuo」が出演し、東京・恵比寿ガーデンプレイスのエビスビル記念館で開催された。今年は特に東日本大震災を受けて、いち早く支援の手を差し伸べてくれたニューオリンズとともに「がんばろう！日本」を合い言葉に微力ながら被災地復興支援に歩を進めた。心温まる1ページがサッチモ祭の歴史に加わる。そして、この日の支援パレードや募金箱に寄せられたご来場者からの**義援金は総額23万円**を超えた。

(小泉良夫)

会場作り、音響…すべてボランティア！ 早稲田ニューオリ30人も朝から応援

会場作りは前日から進められ、当日も午前9時、エビスビル記念館関係者、外山夫妻、WJFスタッフ、それに早稲田大学ニューオリンズ・ジャズ・クラブ(以下ニューオリ)のマネージャー、鉢村太郎さん(3年、P)ら部員約30人！が三々五々会場に集合、音響など最終的な設営、開場準備に入る。そんな中、10時頃には、「サッチモ祭」常連さんが、もう待ちかねたようにエントランス前に長い列を作る。で、11時の開場とともにステージ前の椅子席はほぼ満杯。2500部ほど用意したプログラムとWJF会報58号、アンケート用紙の3点セットが次々と手渡されていく。会場では、プロジェクターを使って、ニューオリンズからの支援

ご協力下さった皆様、温かく力強いご支援！ 本当にありがとうございました

東日本大震災の“余震”で、ことしの開催が危ぶまれていた「第31回サッチモ祭」(TOKYO NEW ORLEANS JAZZ FESTIVAL)は、会場のサッポロビール(株)エビスビル記念館、会場設営・運営など受け持つ(株)フォンテックツー、出演バンドの皆様、WJF会員、スタッフなど皆々様の暖かく力強いご支援と献身で、例年とまったく変わらない環境の中で7月18日(海の日)に開催、新たな感動を生み、最大の盛り上がりを見せてくれました。会場にお越し下さり、ご寄付を下さった皆様にも、心から感謝しております。また今年もご後援下さったアメリカ大使館からはJ. ルース大使のご名代の方まで、会場に足を運んで下さいました。本当にありがとうございました。来年もまたよろしく願い致します。(外山喜雄・恵子)

を受けて宮城・気仙沼のジュニア・ジャズバンド「スウィング・ドルフィンズ」と同・多賀城の小学生ジャズバンド「ブライトキッズ」に贈られた楽器の贈呈、被災地でのコンサート



風景を伝えたテレビのニュース番組がスクリーンに映し出される。



正午、外山夫妻を先頭に

バンドが入場行進、開会を告げる(写真①)。おや？何と！「サファリパークDuo」の野村琴音(ことね)さん(中1、12歳=Tp)とピアノカを吹きながら郷詩(さとし)ケン(小2、7歳=P)姉弟が、早々にパレードに加わっている(写真



③)。横浜からご両親ともどもオープンと同時に駆けつけて来ていた。しかも、休憩時間中の3回に渡る「支援



パレード」の先頭にも立ってくれた。このデュオ特別出演の“本番”は、午後5時過ぎからというのに…。

被災地・岩手で支援活動もやった 若さあふれるニューオリでスタート

幕が上がって第1部、お馴染みの総合司会の名トリオ、山口義憲さん(WJF会報「ワンダフルワールド通信」編集長)、外山恵子さん、ボーカリストの飯塚さち子さんがス

3.11 東日本大震災復興支援「第31回サッチモ祭」

JAZZ FESTIVAL It's a WONDERFUL WORLD

ステージに立ち(写真④)、若さあふれる「ニューオリ」の演奏が始まる(写真⑤)。出演者全員、サッチモ祭のスタッフともども身につけた黄色い T シャツがとっても印象的。ニュー

オリは7月はじめ、被災地の岩手・宮古市

漁旗」が披露され、多賀城からはわざわざご家族でサッチモ祭に来てくれたブライトキッズOB、千葉隆壺君(中1、12歳=Tp,Ds)がステージに呼ばれてお礼のあいさつ。何と千葉君、体育の時間に右足を骨折してギプスを付けての松葉杖姿。多賀城東小学校で彼らの目の前で転倒、“黄金の右腕”を複雑骨折した、右腕にサポーター姿の外山恵子さんと並んで苦笑い(写真⑥)。

米大使館からルース大使の“ご名代” 宮城から上京の父兄もお礼のご対面

ちょうどこの時、今年も「サッチモ祭」を後援してくれているアメリカ大使館から「ルース大使の名代できました」という同大使館の文化・交流担当官、リチャード・メイさんがやってきて外山夫妻と交歓(写真⑦)。千葉君やお母さんの貴久江さんからも楽器のお礼を言われてにっこり(写真⑧)。会場の壁新聞にも紹介されたルース大使のツイッターに頷いたり、スウィング・ドルフィンズの写真や会場のニューオリ女性部員の姿を目の当たりにしたりして「バンドのメンバーは女性が多いんですね。『スウィング・ガールズ』の映画の影響ですか？」なあんて、東の間のサッチモ祭を堪能されていた。今年もサッチモ祭の後援やら、あの「ともだち作戦」、本当にありがとうございました。

休憩20分を利用して支援パレードが会場を回る。出演バンドが次々と加わり、パレードの輪が広がる。アメリカ国旗をかたどった山高帽をかぶり、「復興支援」と書かれたプラカードや募金箱を手にしたニューオリのメンバーも大半が参加(写真②)。募金者にはWJF特製の新作コースターや缶バッジが手渡されていく。この1回だけで寄付金は8万円を超えた。

“いわき”行きやら東北支援バンド… 被災者への鎮魂曲として賛美歌も

第2部は「ナッチェス・バンド」からスタート。サッチモ祭のあと、8月はいつも恒例の“いわき”行きという。今年も当然、行きます！ 12人バンジョー+リズムセクションは「バンジョー・ストンパーズ」。今年は独・ボンでのバンジョーフェスティバルに遠征する。ン？いつもセイントのドラマー、サバオ渡辺さんの“付け人”のようにセッティングのお手伝いやら、時折、セイントをバックに歌ったりしていた池田なみさんが、ここの専属ボーカリストみたいにして登場、熱唱していた。第1回から連続出演、結成ン10年の「ラグピッカ



でボランティア演奏、ジャズ列車を走らせたり…と支援活動(11~12面に記事)、テレビでも紹介されている。各バンドの持ち時間、20分は物足りないほどすぐに終わってしまう。

次いで、ニューオリのOBバンド「デキシー・ドラムカーズ」。ことしもシンガーソングライター、花れんさんをゲスト



に迎え、ジャズに“花”を添える。3番手、粋なカンカン帽でお馴染みの「ザ・サーフサイド・ストンプ」は、今年結成20年。メンバーの半数近くがサラリーマンを“卒業”したそうだ。第1部のしんがり、東京医科歯科大学の学生バンドだった「ドクター・デキシーセイント」は結成23年。“地獄の合宿”で若さと健康を保っているという。

演奏は休憩に入り、この間、司会者から先の気仙沼ジュニアバンド支援の際にメンバーから贈られたお礼の「大

ーズ」は、それでもメンバーに若手を加えていき、若さを保つ“不死鳥バンド”とか。「デキシー・ダンディーズ」は工学院大学OBを中心としたバンド。今回16回目の参加。「セカンドライナーズ」はサッポロビールとご縁があるそうで、一昨年は宮崎シーガイア、昨年は横浜ロイヤルウイング、そして今年は旭川で社長さんとお会いできそうとか。

ここで再び支援パレードを挟み第3部は「ニューオリンズ・ノウティーズ」からスタート。ここもニューオリOBが中心。結成は1963年…ということは、バンド結成48年。正統派ニューオリンズ・ジャズを信奉、継承しておりニューオリンズの名誉市民。続く「ニューオリンズ・ジャズハウズ」は、大震災で亡くなられた方々への鎮魂曲として賛美歌を2曲演奏してくれた。プロの名手、下間哲さん(Tp)を加えた「デキシー・ショーケース」は、月に1回、東北支援チャリティー音楽会を開催しているという。今回は異色の主婦コーラスグループ「Shooties」のちかまつともさんら5人が加わり、「On A Slow Boat To China」をエレガントに歌い上げた。「キャナル・ストリート・ジャズ・バンド」は、“新宿ジャズ”でおなじみの「新宿トラッド・ジャズ・フェスティバルinハレクラニ」の事務局長、永谷正嗣さん(Ts)が熱演。今年の春は大震災の影響で開催できなかったが、この秋は11月12、13両日の開催が決まった。えう、ご期待！

ジャズ姉弟「サファリパークDuo」登場 琴音さんと郷詩クンの熱演に大喝采

休憩のあと、この日3度目の支援パレード。セイントも加わって大いに盛り上がる。パレードのあとはすっかりサッチモ祭の名物ともなった特別企画「サッチモに捧げて！！トランペット大集合」。外山喜雄さんら5人のトランペッターに、セイントリズムセクションなど3人が加わり、ドレスアップした司会の飯塚さち子さんもお待たせの熱唱！（写真上）「On The Sunny Side Of The Street」。続いてこちらもやっと出番が回ってきました、大喝采の中、子どもジャズ姉弟「サファリパークDuo」の登場。琴音さんと郷詩クン！ 2人はオープニングのパレードと3回にわたる支援パレードにも参加していたので、もうちょっ



とくたびれちゃった！？ それでも元気いっぱい…ピアノの郷詩クンなど、椅子に座って足がブラブラ…床にまだ届

かない！ いつもは立って、低めにセッティングしたキーボードを弾くことが多い。曲目は「All Of Me」と「I Got Rhythm」。「スウィング・ドルフィンズ」といい、ブイトキッズといい、子供達がジャズをこんなに楽しく演奏してくれて…」と、外山夫妻は目を細める。夫妻から黒人の子どもジャズバンドのフィギュアやらニューオリンズのお人形など、プレゼントも貰ってニコニコ。



サッチモ祭の功労者、肥後崎さん 難病を克服し“復活のステージ”！

いよいよフィナーレを迎える第4部。「浅草 HUB」、西荻窪「MINTON HOUSE」、横浜駅西口「ハマ横丁」などにも



肥後崎さん、お見事！復活ステージ

出演している「ハightタイム・ローラーズ」は結成12年。皆様、ぜひそちらにも足を運んで下さい！そして、アマの締めくくりは「大丸リユニオン・ジャズメン」。第1回（1981年＝昭和56年）からの連続出演！それもそのはず、みなさんのご努力で当時お勤めだった大丸の屋上ビアガーデンを貸していただき、このサッチモ祭が始まったのです。「大丸ニューオリンズ・ジャズメン」（当時）として、演奏にも参加してくれたのですよ。

リーダーの肥後崎英二さん(Cor)はもちろんWJF会員でサッチモ祭の実行委員でもある。その肥後崎さん、09年

サッチモ祭の会場設営の際に骨折、それがまた難病で翌10年の30回記念は車椅子で来場、演奏に耳を傾けていただけ…さて、今年は…と、みんな心配していたら、真新しいコルネットを携えてステージに上がってきましたよ。

それに「Bill Bailey」と「I'm Confession」の2曲はボーカルまで披露する回復ぶり。「はい…ですから、骨折して以来の初ステージなんですよ」には、2度びっくり。サッチモ祭は“元気の素”みたいなんでしょう。（次頁下段に続く）

早稲田ニューオリ→ 大震災被災地・宮古市で JAZZボランティア

寄稿：マネージャー、鉢村太郎さん(3年)



震災が起きた時は本当に信じられない思いでした。その時僕はちょうどニューオリンズへ渡航していたので、地震を直接体験することではなく、テレビで報道されているのを見ただけだったのです。それから1週間後、帰国し知り合いや部員も皆無事だったことを知って本当にほっとしましたが、しかしテレビで報道される内容は日に日に酷なものが増えていました。朝起きて原発のニュースにハラハラしながら、犠牲になった方の数が今日も増えているのを見る日々。被災地に遠い僕らですら気が滅入るのですから、き

っと現地の方は信じられない位のストレスを感じているのだらうと思いました。

そんな時に大学の方から、「被災地へニューオリで演奏ボランティアへ行って見ないか？」と誘って頂いたのです。

被災地の方々の気持ちを、音楽を届けることで少しでも前向きに出来たら。そんな思いがあったので、喜んで引き受けさせて頂きました。

早稲田にはボランティア関係を管轄している平山郁夫記念ボランティアセンター、通称 WAVOC という所がありますが、その WAVOC と現地の方々を通じて今回のボランティアは計画されました。早大生から募ったボランティアメンバーが田老町での清掃活動を行い、ニューオリは宮古市で演奏や音楽指導を行うという、二段構成の活動です。

(次ページへ続く)

<前頁から「サッチモ祭」続き>

「この会場から元気を発進しよう！」 万難を排して会場開放の竹林館長

トリは「外山喜雄とデキシーセインツ」=外山喜雄(Tp, Vo)、外山恵子(P, Bj)、粉川忠範(Tb)、鈴木孝二(CI)、藤崎羊一(B)、サバ



オ渡辺(Ds)=写真上=。この演奏に先立って、エビスビール記念館の竹林明館長が挨拶、「この会場から“元気”を全国に発進しましょう！」と(写真左下)。そう、がんばろう！日本、何よりも“元気”が必要なんで



す。館長さん、万難を排して会場を貸して下さり、ありがとうございました。

セインツの最初の曲は「Mack The Knife」…これも元気が出ますねえ。恵子さん、骨折した右手に何とかサポーターを巻いて



ピアノを弾いている。大震災後に再び注目を集めている曲「上を向いて歩こう」が続く。プロジェクターに歌詞も映し出され、お客さんも全員参加の大合唱。<本当は悲しく切

ない、いわば哀歌(エレジー)なのだけれど、坂本九の声と「歌う力」で希望と再生の歌になった>…なあって、この日

の産経新聞に書いてありました。恵子さんはバンジョーも弾きましたよ。クラリネットとともに厳かな「朽ち果てた十字架」(写真左の中段)。(終わって「…でもちょっと、手首が腫れてきちゃった」と湿布)

「聖者の行進」で締めくくり…いや、まだありました。「この素晴らしき世界」。この歌詞(英語)もプロジェクターで投影、客席は再び大合唱。ニューオリのみなさんがセカンドラインの傘を掲げ、ステップを踏んで、客席の周囲を埋め尽くす。素晴らしいフィナーレ(写真左の下段)。時刻はすでに午後7時半を回っていた。

主催：日本ルイ・アームストロング協会
協賛：エビスビール記念館、(有)ノラミュージック
後援：アメリカ大使館
協力：サッポロビール株式会社、サッポロ飲料株式会社

早稲田ニューオリが宮城・宮古市でボランティア！JAZZの演奏と音楽指導

パートに分けて楽器の吹き方や「聖者の行進」のメロディー教える

7月1日の夜、僕たちは早稲田からバスに乗り込み宮古市へ向かいました。総勢29名、ボランティアの旨を伝えたとくろ多くの部員が参加を申し出て、ここまでの人数に膨れ上がりました。バス内で1夜を過ごし、2日の朝に宮古市へ到着。

1番最初の活動は、宮古の吹奏楽部の小学生たちに演奏指導を行うことでした。ニューオリは依頼を受けて演奏をさせて頂くことはあれど、音楽指導などはまったくの経験ゼロです。手探りではありましたが、楽器ごとに少人数のパートに分け、楽器の吹き方や、おなじみ「聖者の行進」のメロディーを教えました。

2時間ほどの指導を終えて、宮古駅前へ移動。この日ここでは七夕まつりが開催され、ステージで小学生のみなどと宮古の中学生の吹奏楽部、僕たちとで演奏を行うことになっていたのです。

彼らの演奏を聴いた後、僕らもブラスバンドで3、4曲演奏(写真上)を行い、その後は皆で「聖者の行進」を合奏しました。心に響くステージでした。震災直後から、子供たちはほとんど楽器を触ることがなかった、と聞かされていたのに、シンのあるしっかりと音色で演奏をし、ついさっき教えたメロディーを朗々と吹いて、見事な共演してくれました。



電車から降り、別行動をしていた田老班の方たちとも合流しました。清掃活動を行っていた田老班の人たちへの感謝を込め、宮古駅前前で再度演奏。長い1日の活動を終えました。

宿泊先は宮古北高校です。かつて避難した方々がそうしていた様に、大きな体育館で男子たちは泊るようになっていました。寝袋を取り出し、体操マットを下に敷くなど苦戦しながら寝心地の良さを追求しました(女子はもう少し寝やすい場所だったようです)。

夜には各自で反省会なども行ったのですが、その際に宮古北高校の先生方に、震災の際の話をして頂きました。身近な人々が行方不明になる恐ろしさ、電気やガスも無い中、体育館に避難してきた人々にどう対応するのか、協力し合う中で生徒たちが見せた意志の強さなど、直に語られる話は今日の体験とも相まって、様々な気持ちにさせられました。

宮古北高校吹奏楽部に“音楽指導”ニューオリ部員も現地で多くを学ぶ

最終日の3日朝、最後の活動として宮古北高校の吹奏楽部の生徒たちに指導を行いました。この日にもう発つことになっていた

ので、限られた時間限られた内容でしか教えられず、それが今でも残念です。数人の生徒たちはみな礼儀正しく僕たちの演奏(写真下)、話に耳を傾けてくれました。再び「聖者の行進」を最後に合奏。ボランティアに同行して下さった早稲田の職員の方や田老班の皆さんからも聴いて頂き、こうしてこの演奏活動に幕が下りたのでした。現地の方々に見送られて、バスで宮古を出発、3日夜に無事に早稲田へと帰ってきました。

ボランティアに行き行って感じたことですが、やはりこういった活動は一方が一方に対してだけ行うものではないのかもしれませんが。僕らニューオリの部員が現地の方々へ演奏や、指導をして何かを送ると同時に、部員たちもまた彼らから震災時の話や、普段接することのない経験など多くのものを受け取っていたように思うのです。

宮古北高校の先生からお聞きしたのですが、現地の人々が今不安に思っていることは、こういった支援がこのまま続いていくのか、ということだそうです。生活環境など物理的な物の復旧だけでなく、被災された方たちの精神的なケアもまだまだ必要で、それが継続して行われない限りは、やはり完全な復興を遂げるのは難しいのだと思います。

ニューオリも、こういった支援活動を何かしらの形で続けていければと感じました。

宮古駅から三陸鉄道に21人が乗車 車内でお客さんにジャズをプレゼント

七夕まつりのコンサートを終え3時ごろになり、今度は三陸鉄道での演奏(写真中)です。宮古駅から出ている三陸鉄道に乗り込み、運行する鉄道の中でジャズの演奏を行うという、非常に面白いアイデアの企画です。21人の部員が乗り込み、4つのバンドで行き帰り2回ずつ演奏を行いました。たくさんのお客さんに楽しんで聴いて頂けたようで、演奏の手ごたえも感じられました。ただ、演奏の途中で車窓から瓦礫の山が垣間見られた事が忘れられません。ほんの数カ月前にここで誰もが想像しないような事が突然起こり、多くの物が奪われた。ガタゴトと揺れる電車の中で、震災という重みを感じた瞬間でした。



特別寄稿

モダン・ジャズ全盛期に

トラッド・ジャズを聴かせた2軒のジャズ喫茶(上)

「渋谷スイング」と「水道橋スイング」

——柳澤 安信さん(WJF 会員、白人コルネット奏者ビックス・バイダーベック研究者)

昭和36年(1961年)正月、アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズの来日公演をきっかけに、日本全国にモダン・ジャズ・ブームが沸き起こった。それまでのジャズ・シーンは、ユニバーサル映画「グレン・ミラー物語」(1953年アンソニー・マン監督、ジェームス・スチュアート、ジューン・アリスン主演)や「ベニイ・グッドマン物語」(1955年バレンタイン・デビス監督、スティーブ・アレン、ドナ・リード主演)のヒットにより、スイング・スタイルのジャズが一般庶民にはおなじみで、ジーン・クルーパ、JATP、ルイ・アームストロングの来日公演は、進駐軍やごく一部のジャズ・ファンのためのものであったといつてよい。それがアート・ブレイキーの来日によって一変した。強烈なリズムとパワー、黒人独特のブルース・フィーリングを前面に押し出したハード・バップ・スタイルの演奏に、日本人は驚き、それまでジャズ音楽には眼もくれなかった小説家、詩人、知識人、マスコミも「これが本物のジャズだ！」と絶賛、ハード・バップ・ジャズが大流行となった。これは体験したわけではないが、当時銭湯に行くと、湯船で浪曲に代わってメッセンジャーズのヒット曲「モーニン」や「ブルース・マーチ」を唸るお客さんがいたという。東京にはモダン・ジャズを聴かせるジャズ喫茶が何件も開店、それは全国に広がっていった。若者はモダン・ジャズ喫茶でジャズを聴くのが流行の最先端に行く生活スタイルだった。

しかしそんな環境の中で、モダン・ジャズには目もくれず、それ以前のトラディショナル・ジャズを専門に聴かせるジャズ喫茶が2軒あった。「渋谷スイング」と「水道橋スイング」である。当時このほかにトラッド・ジャズの専門店が他にあるとは聞いたことがなく、おそらく全国でこの2軒だけだったに違いない。

<渋谷スイング編>

モダン・ジャズ主流のご時世に 貴重だった“ディキシー専門店”

「渋谷スイング」は道玄坂を登って行き、日本楽器の少し手前を右に入った百軒店の路地裏にあった。「オスカカー」というモダン・ジャズ喫茶の右隣がテアトル・ハイツで、ちょうどその裏に当たる。店主は宮沢修造氏である。宮沢さんは大正4年(1915年)生まれ、日本のジャズ喫茶オーナーの草分けの一人で、昭和26年(1951年)5月、銀座7丁目松坂屋裏の消防署前に、ジャズを専門に聴かせる「銀座スイング」を開いた。そのお店が渋谷へも進出したのは昭和30年(1955年)7月である。当時のスイング・ジャーナル誌には銀座と渋谷の2軒の「スイング」の広告が載っており、銀座の店も昭和32年ごろまで開いていたと思われる。「銀座スイング」はスイングやモダン・ジャズを主流にしていたが、「渋谷スイング」はディキシー専門店である。

高校時代にスイング・ジャーナル誌の広告でこのお店の存在を知っていた私は、昭和33年(1958年)の4月に

長野県上田市から上京、一人都会暮らしをしながら「渋谷スイング」へ通うようになった。「渋谷スイング」は8畳ぐらいの大変小さいお店で、入り口右手のカウンター前にはいつも常連が我が物顔に立っていて、ギャングが出入りする密造酒場のような雰囲気だった。勇気を出して店に入り、いつも隅のほうに座って聴いていた。よくリクエストしたのはジョージ・ルイスの「American Music by George

Lewis」(AM 639)である。このLPに入っている「波濤を越えて」は、ジョージ・ルイスのレコードの中で、今でも最も好みの演奏である。「Jass at Ohio Union」(Disc Jockey DJL-100)の「世界は日の出を待っている」もよくかかった。

お店に教科書を置き大学へ 毎日通ってキャンまで聴く

毎日通っているうちに、私のジャズへの情熱がマスターにも通じたらしく、親しく話をするようになり、常連の仲間に入れてもらえるようになった。お店に教科書を置かせてもらい、大学へはスイングから通った。午後の授業が終わるとスイングへ直行、夕食は百軒店や恋文横丁の中華で済まし、またスイングへ戻ってキャンまで聴くのが日課だった。一杯のコーヒーで一日中粘っていたのだから、今思うと大変非常識な行動だった。宮沢さんは飯山市の出身で私とは同県人のよしみもあったが、他の常連の身勝手にも同様に、誰にも文句を言わな



渋谷スイングと筆者(昭和35年1月)

い心の豊かな主人だった。

この狭い「スイング」は昭和35年(1960年)の暮れに、同じ百軒店の中の少し道玄坂方面に戻った曲がり角に移転した。店の広さは前の3倍以上50席ぐらいの「新渋谷スイング」になった。ピアノは置いてなかったがライブが出来るスペースである。その開店祝いに常連仲間で門灯を贈った覚えがある。移転後の「旧渋谷スイング」はモダン・ジャズ喫茶「ありんこ」になった。「新スイング」の斜め向かいには中平穂積氏の「渋谷ディグ」がモダン・ジャズを聴かせていた。同じ百軒店には表道りに、劇場スタイルの配列でスピーカーに向かって聴く「オスカー」、石段を下った道玄坂小路の左手には「デュエット」があり、ディキシシーを聴いた後の気分転換に、これらのお店もはしごして、モダン・ジャズも良く聴いたものである。

次々とジャズ仲間が増え続け 愛好誌「Jazz Giants」を作る

「渋谷スイング」では多くのジャズ・ファンと知り合いになった。まず常連の先輩に田中光彦氏がいる。私も毎日のようにスイングに通った自信はあるが、彼は私以上で、私が行った時には必ず聴きに来ているのには恐れ入った。田中さんは現在仙台の宮城縣護国神社の宮司をされていて、仙台の著名人の一人のようだ。今でも東京のジャズ・イベントで時々顔を合わせることもある。

いつも一緒に聴いていた常連には稲垣誠一、手塚昌宏、福沢豊、林清一、高橋利昭、椋山雄作、小林佳弘らの各氏がいた。特に稲垣さんはクラシック・ジャズからモダン・ジャズまで幅広く聴いていて、われわれの先生役であった。昭和40年ごろ毎晩顔を合わせるこの仲間達で、愛好誌を作って読み合っ楽しんでやろうと「Jazz Giants」という冊子を作ったこともあった。

「デュエット」の方にはブラインド・ホールド・テストで有名な見富栄一氏や柴田博氏らがたむろしていた。彼らのグループがスイングにやってくると、「モダン・ジャズ・ファンが殴りこみに来た」と我々ディキシシー・ファンは警戒網を敷いた。当時モダン・ジャズ・ファンは肩で風を切って歩き、トラッド・ファンは流行に乗れないダサイ存在で、引け目を感じていた。見方によっては、それは現在も同じである。

石川順三、田川善三両氏ら… ミュージシャンとも心を通わせ

ミュージシャンでは園田憲一とディキシシー・キングスの初代クラリネット奏者、石川順三氏がいる。石川さんは私より10歳年上だが、スイングで話していると何となく気持ちが通じ合い、その後も交流が続いた。彼はディキシシー・キングスを退団すると、昭和42年に自身のバンド「石川順三トリヴァー・サウンズ」を結成、58年にはディズニールンドとも契約したが、気の毒なことに歯を痛めてプロ・ミュージシャンを断念してしまった。その後柏市のタクシー会社に勤務しながら歯の治療とクラリネットの練習に励み、平成8年(1996年)演奏活動を再開した。タクシーの運転手は12年やったという。旧友城英輔氏、井上良(平成21年3月没)氏や下間哲氏を迎えて、柏市の小さなホールで始めたコンサートは平成14年まで続き、タクシー会社の社長が花束を持って駆けつける和やかなイベントだった。石川さんとは平成22年(2010年)5月の「新宿春の

ジャズ祭り」で思いもかけずお目にかかり、再会を喜び合った。

斉藤隆とディキシシー・デュークスのバンジョー奏者、田川善三氏もよく出入りしていた。田川さんは昭和38年に奥さんを連れて渡米してしまった。西海岸のサン・ホセに住み、バンジョー教師のチャーリー田川として、100名余のバンジョー・バンドを率い、毎年バンジョー・ジュビリーを主催するなど大活躍を続けている。その明るい人柄で日本にもたくさんファンを持つ。しかしすでに亡くなられてしまったチャーリー田川夫人は、実は「渋谷スイング」の常連で、

我々の仲間だったことは全く知られていない。



福沢豊氏(左)と筆者=昭和37年頃、新渋谷スイングにて

機関車操車場の土手で外山氏 練習したりレコードを聴いたり…

コマーシャルなジャズとは一線を引く笠井義正氏とは、渋谷時代からの知り合いである。当時私の下宿が田端、笠井さんは京浜東北線一駅先の上中里に住んでいた。笠井さんの家にレコードを聴かせてもらいに行くと、コタツの上に電蓄を置き、ブランズウィックの「フランク・テッシュメイカーとベニー・グッドマン」(日本グラモフォンLPCM-2019)をかけ、「テッシュメイカーのこの情熱を聴

け！これがジャズだ」と教えられた。私がビックス・バイダーベックやシカゴ・スタイル・ジャズが好きになったのは、これがきっかけだった。

外山喜雄氏はまだ高校生のトランペッターで、バンク・ジョンソンに深く傾倒していた。田端の下宿に帰ってくると、どこからかジャズが聞こえてくるので不思議に思い、

自分の部屋に行くと、何と外山氏がレコードをかけて聴いているではないか。田端には当時機関車の操作場があり、彼は操作場の土手に座って、私の大好きなビックス・バイダーベックの「ジャズ・ミー・ブルース」を吹いてくれた。その後外山さんは早稲田大学のニューオリンズ・



「渋谷スイング」店主・宮沢修造氏＝ジャズ批評誌座談会にて(平成10年8月)

ジャズ・クラブに進み、昭和43年(1968年)恵子夫人と共にニューオリンズへジャズの武者修行に旅立っていった。

この当時は大学のディキシーランド・バンドの活動が活発で、「大学ディキシーランド・ジャズ連盟」(会長杉田憲雄氏)に加盟する各大学のメンバーが沢山聴きに来ていた。「呑者家」の主人で、今や新宿トラッド・ジャズ・フェスティバルを取り仕切るキャナル・ストリート・ジャズ・バンドの永谷正嗣氏は、バイユー・ストンパーズの橋克彦氏といつも二人で聴きに来ていた。「カーゴ・ディックス」というアマチュア・バンドのクラリネット、菅野天津男氏、同じクラリネットで國學院大学の渡部明氏や芝浦工大のリズム・ギター清岡隆二氏とも友達になった。皆トラッド・ジャズのレコードを真剣に聴き込んでいた。

さてこのディキシーの専門店として有名だった「渋谷スイング」は、昭和40年頃にモダン・ジャズ喫茶に衣替えすることになる。トラッド・ジャズが好きな私はこの経営転換によって、だんだん足が遠のくようになり、代わって「水道橋スイング」の方へ足繁く通うようになった。その後「渋谷スイング」は更に宇田川町へ移り、ビデオ機材の普及に伴い、ジャズ・ミュージシャンの演奏場面が鑑賞できる「ビデオ・ジャズ喫茶」に変身していった。

そして平成9年(1997年)12月宮沢修造氏の「スイング」は、銀座に開店してから実に46年間の歴史に幕を閉じた。

平成10年8月、久々に宮沢氏と再会 ジャズ評論誌の座談会で熱弁を振るう

平成10年8月ジャズ批評誌の座談会があり、渋谷東急インで久しぶりに宮沢さんにお目にかかった。大変お元気で昔と全く変わらず旧交を温めた。座談会でも熱弁を振るっていた。宮沢さんは渋谷を散歩するのが好きで、その後も路上でばったり会うと、近くのうなぎ屋でご馳走になったり、コーヒー・ショップに誘われ雑談したこともあった。平成19年になり、こしばらく音信がないので電話してみると、90歳を越え車椅子の生活になり、娘さんが自宅で介護しているとのことだった。そして4月の中旬、娘の成子さんから「父が4月13日に92歳で亡くなった」との連絡を頂いた。宮沢修造さんには本当にお世話になった。毎日、毎晩ジャズ喫茶ですごした時代が懐かしい。今はご冥福を祈るのみである。

平成19年3月久しぶりに百軒店を歩いてみた。「旧渋谷スイング」はポーカーゲーム場「AGAIN」、ほかに居酒屋&BAR「Big Hot」とスナック「ぴえろ」の看板があり、3店



「渋谷スイング」の雑誌広告

舗入った遊興場になっている。移転した曲がり角の「新渋谷スイング」は、店の名前がない得体の知れない風俗店になっていた。筋向いの「渋谷 DIG」は和食居酒屋「いのもと」、ここは当時のままだ。「オスカー」とテアトル・ハイツの跡地は、4階建ての店舗ビルに変わってしまった。創業昭和26年の印度料理「ムルギー」は、今でも営業を続けていて本当に懐かしい。中華麺店「喜楽」も店舗は建て替えられているが、当時の場所にあり繁盛しているようだ。石段を下っていった道玄坂小路の「デュエット」は、飲食店が並んでいて跡地の特定が難しいが、らーめん専門店「小川」のあたりにあったと思う。懐かしい恋文横丁は再開発工事中で、全く昔の面影はなくなってしまった。表通りの元祖「くじら屋」は駅よりに移り、渋谷109のビル1階で営業していた。渋谷は私にとって、青春時代を過ごしたジャズの街であった。(「水道橋スイング」編は、次号でお届けします)

創業昭和26年の印度料理「ムルギー」は、今でも営業を続けていて本当に懐かしい。中華麺店「喜楽」も店舗は建て替えられているが、当時の場所にあり繁盛しているようだ。石段を下っていった道玄坂小路の「デュエット」は、飲食店が並んでいて跡地の特定が難しいが、らーめん専門店「小川」のあたりにあったと思う。懐かしい恋文横丁は再開発工事中で、全く昔の面影はなくなってしまった。表通りの元祖「くじら屋」は駅よりに移り、渋谷109のビル1階で営業していた。渋谷は私にとって、青春時代を過ごしたジャズの街であった。(「水道橋スイング」編は、次号でお届けします)

<参考資料>

スイング・ジャーナル1957年6月号

ジャズ批評 No.97 最後の珍盤を求めて「渋谷スイング同窓会の巻」(1998年10月)

ご寄付と嬉しいお手紙

ありがとうございます！！

- ◆増田一洋様 (沼津市) トランペット
- ◆加藤令子様 (横浜市) バイオリン
 - ◆大川路子様(豊島区) ギター
- ◆羽賀健悟様(福岡県) トランペット
- ◆オー・ペリー・ウォーカー高校 (ニューオリンズ) バイオリン
- ◆グローバル管楽器技術学院(新宿区) トランペットご寄付と楽器の無償修理
- ◆堀井正義様(会員 松戸市) 50,000円
- ◆内藤寿昭様(会員 中野区) 30,000円
- ◆第31回サッチモ祭ご寄付 248,129円
有り難うございました！！

千葉市で巡る「外山夫妻とマエストロの旅」 来年2012年1月6/7の両日

What a Wonderful World ～生誕110周年記念～
2日間3公演でルイ・アームストロングの魅力を集

* 出演: 外山喜雄とデキシーセインツほか

(詳細は次号「70号」で)

今年も晩夏の高原で斑尾ジャズ 「第5回ふるさとのジャズ交流祭 in 斑尾」

「第5回ふるさとのジャズ交流祭 in 斑尾」が8月20日(土)～21日(日)の2日間、斑尾高原の特設野外ステージで開催された。日本ルイ・アームストロング協会は第1回から協力に名を連ねており、実行委員長の新山敏さんは同協会の会員で、山口義憲編集長も例年、司会として参加している。

雨模様で、肌寒い気候だったが、20のバンドが熱演を披露、ビッグバンド、多彩なコンボ陣が個性あふれる演奏で観客を魅了、特別ゲストの“瀬川昌久賞”には、平均年齢25歳の“Big Band Bazooka”が将来への期待込での受賞となった。

会場には「希望の壺」が置かれ、寄せられた寄付金は震災被災地への寄付となる予定だ。

また、震災支援の曲のひとつとして演奏された、サッチモの「この素晴らしき世界」が斑尾の高原に響きわたった。

<訂正>68号5ページでティティナス財団からの寄金が「1000ドル(90万円相当)」とあるのは、「1万ドル」の誤りでした。訂正します。

JAZZ 千葉市で巡るマエストロの旅 Vol.1 広告

What a Wonderful World
～生誕110周年記念 Jazzの巨匠ルイ・アームストロング～

2日間3公演でルイ・アームストロングの魅力を集！

1/6 (金) 18:00 美浜文化ホール 一般 ¥1,500 中学生以下 ¥1,000
秘蔵映像満載でお送りする“銀幕スター”サッチモの魅力！

1/7 (土) 14:00 若葉文化ホール 一般 ¥2,000 中学生以下 ¥1,000
軽快なトークと実演で Jazz の歴史をひも解く！

10月15日 (土) 10:00 発売!!
お得な通し券あり!!
4,800円(税込)

出演: 外山喜雄・恵子 金子晴美 大原保人 小川理子 and more!
共催/監修: 日本ルイ・アームストロング協会 協力: 早稲田大学ニューオリンズジャズクラブ

募集中!

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい!!

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership)	¥6,000
学生会員(Student Membership)	¥3,000
賛助会員(Friends of Louis Armstrong)	¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通: 5175119「ワンダフルワールド」

お問い合わせは: WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax: 047-355-1004

Email: saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン: Yahoo, Google で

ルイ・アームストロング

◆6日(金)午後6時～ 美浜文化ホール

<映像が語る サッチモのワンダフルワールド!>

“銀幕のスター”その生い立ちと魅力、名場面ハイライト集

◆7日(土)午後2時～ 若葉文化ホール

<ルイ・アームストロングとジャズの歴史>

ジャズの誕生と世界の音楽を変えたジャズの巨人サッチモ
ジャズとサッチモの故郷 ニューオリンズ スイングしなげりや
意味がない!! 外山喜雄とデキシーセインツ

◆7日午後6時～ 文化センター

<この素晴らしきサッチモの世界>

魅力満載スペシャルコンサート、サッチモ名曲集 ジャズを改
革したサッチモのトランペット奏法 サッチモとディズニー、ウ
ィー・ラブ・サッチモ デキシーセインツ 金子晴美ほか

3・11東日本大震災は、WJFとニューオリンズの絆を一層深めるきっかけとなりました▼トップページ「サッチモの旅2011」ニューオリンズ編は、この夏、ニューオリンズでの心の交流を伝えます▼ルイ・アームストロング国際空港、ウオーカー高校、ジャズ・クルーズ、サッチモ・クラブ・ストラット、外山会長夫妻のセミナー講演、本番ステージ、ティピナス財団への「大漁旗」、そしてジャズミサなど感動がいっぱいの特集です。17年間におよぶWJFの活動はしっかりと地に根をはり、見事な成果をもたらしました▼早稲田大学JAZZボランティア記事やサッチモ祭レポートも震災支援の活動を伝えていきます▼柳沢安信さんの渋谷/水道橋スイングを語る特別寄稿は、青春時代のジャズへのオマージュでもありません▼来年1月に「外山夫妻とマエストロの旅」生誕110周年記念開催が決定、このページ上に速報が掲載されています。(山)

編集長から